

## はじめに

近年、社会や医療において、看護職は専門性や幅広い分野で活躍が期待されています。専門性においては、看護職には、質の高い看護実践・看護ケアを提供するために認定看護師や専門看護師、特定行為研修などの資格認定の制度があります。

また、「看護学」とは何かという問いに簡単に答えるのは難しいと思いますが、看護学という学問は最大の教養であると私は考えます。医学・薬学のほか、心理学、経済学、理学、工学など、挙げきれないほどの学問と融合・連携することにより、質の高い看護が人々の健康に寄与していきます。そのため、医療現場だけでなく、疾病の予防もしくは人々の生活のQOL改善に向けて、例えば、衣類や食品の開発会社、また、患者により良い薬を開発するための製薬会社で活躍している看護職もいます。

さて、「薬理学」という学問は、小・中・高校で学習してきた科目ではないため、勉強したいけれど理解が難しいと思う学生さんも少なくないと思います。しかし、上述した専門性や幅広い分野での看護職の基盤となる知識や技術の一つが「薬理学」という科目になります。今、社会において、看護実践・看護ケア提供時に必要なアセスメントを行うためには、看護の基盤となる基礎的な知識（解剖学、生理学、病態学、薬理学など）の充実が、看護学教育や専門性のある看護職の育成に求められています。

また、「薬理学」が人の生命・健康に関わる広い分野の看護職の基盤に重要な理由はほかにもあります。薬の原料は、植物や鉱物由来のもの、食品に含まれる成分、生体内成分であることも多いです。薬と同じ成分は人々の身体や生活の中に存在しています。そのため、薬は疾病をもつ人々だけに必要な知識というわけではなく、QOL向上のための身近で重要な基礎知識といえるのです。このように必要性を理解したり、違う視点で「薬理学」をみたりすることで、皆さんの興味や学習の深まりにつながっていきやすく思います。

最後に、看護職を目指す皆さんへ、本書を通して、メッセージがあります。臨床現場において、薬物治療が薬物有害反応なく患者にとって最大の効果をもたらすことができるのは、常にベッドサイドで薬の効果や薬物有害反応の確認、経過観察を行い、医師や薬剤師と連携している看護職の力が大きいと思っています。また、人々の生活の場である地域活動において、衣食住の環境から、健康に対する危険を察知できるのも看護職の観察力だと思っています。本書は、皆さんの看護職としての「患者を見る」基盤知識に役立つことを願い、医師・薬剤師・看護師と連携して作成しました。薬の作用メカニズムもわかりやすく記載してありますので、学生時代のみには用いるのではなく、ぜひ、看護職になっても振り返って学べる本として活用していただけると幸いです。